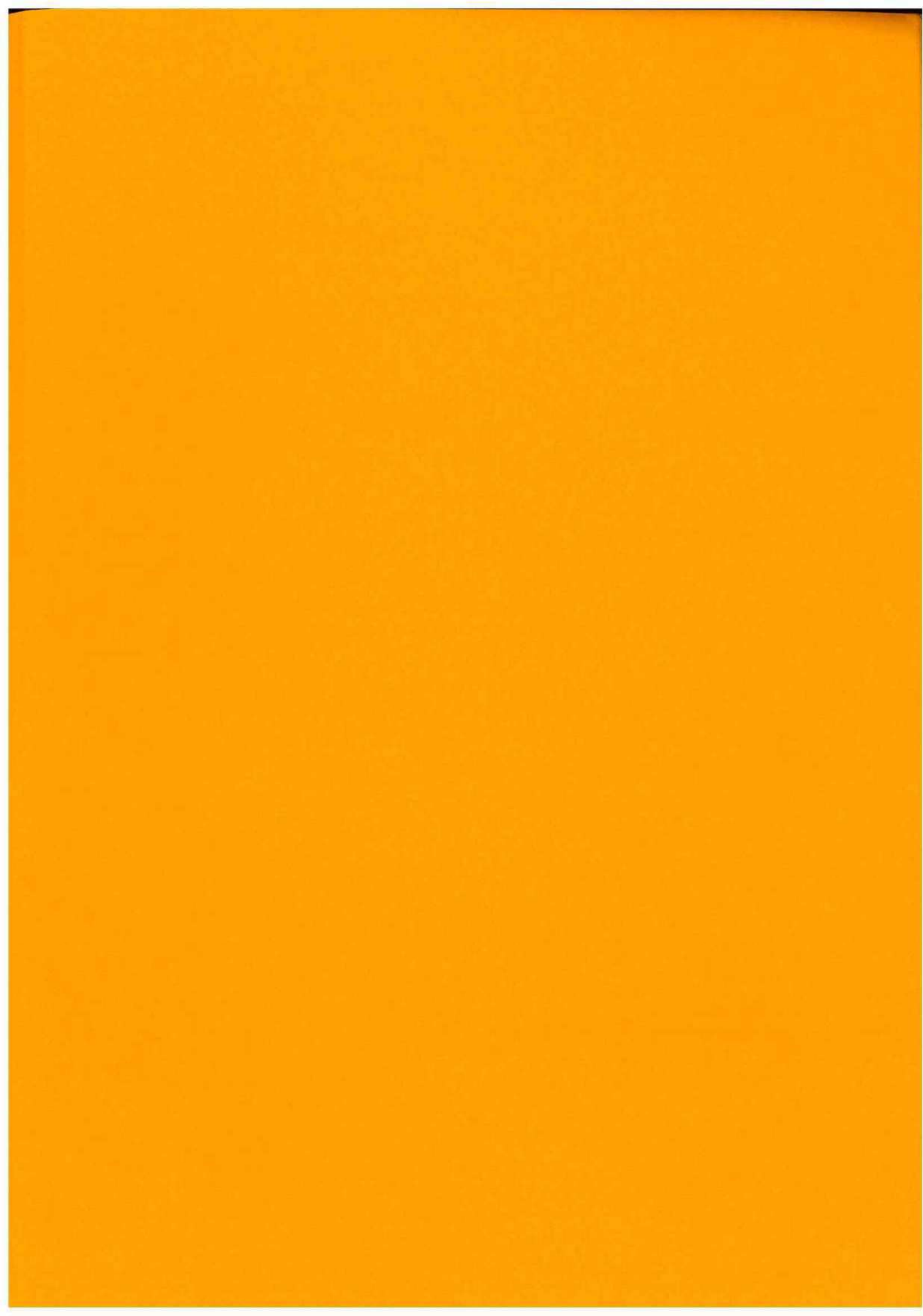


村上遺跡



2014 年 3 月

浜松市教育委員会



例 言

- 1 本書は、浜松市北区三ヶ日町岡本 663-3 ほかにおける村上遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国道 301 号線道路改良工事（主管：浜松市土木部北土木整備事務所）に先立ち実施した。
- 3 発掘調査は、浜松市（土木部北土木整備事務所）の依頼を受け、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の期間は、平成 25 年（2013 年）7 月 1 日から平成 26 年（2014 年）3 月 20 日である。このうち現地発掘調査は、平成 25 年（2013 年）7 月 1 日から平成 25 年 7 月 2 日の間と、平成 25 年（2013 年）9 月 24 日から 10 月 3 日の間に実施した。調査面積は 66 m²である。
- 5 現地調査は井口智博、首藤久士、和田達也、川西啓喜（浜松市文化財課）が担当し、熊谷洋子、武田裕美、藤森紀子（浜松市文化財課）が補佐した。
- 6 整理作業は井口、和田が担当し、熊谷、武田と水島絵理（浜松市文化財課）が補佐した。本書の執筆は、第 1 章の 1 を井口が、その他の執筆と編集を和田が行った。
- 7 調査の記録、出土遺物は浜松市文化財課が保管している。
- 8 本書で用いる方位は真北を示す。標高は海拔高である。
- 9 本書の作成にあたり、増山禎之、藤澤良祐各氏の協力を賜った。

目 次

例言

第 1 章	序 論	1
第 2 章	調査成果	7
第 3 章	総 括	19

図版

第1章 序 論

1 調査にいたる経緯

村上遺跡は、浜松市北区三ヶ日町岡本地区に位置する。浜名湖の北岸に位置する当地は、2005年の広域合併以前には、引佐郡三ヶ日町に属していた。遺跡は釣橋川と宇利山川に挟まれた段丘上に立地しており、近傍には伊勢神宮に神御衣を奉納する神事を執り行った初生衣神社がある。また、初生衣神社の北側に位置する楠木遺跡では、奈良時代の瓦が大量に発見され、三ヶ日町の古代史を語る上で重要な発見がなされている。

岡本地区を横切る国道301号線は、湖西市と愛知県新城市を結び、三ヶ日町における南北方向の基幹道路として多くの交通量がある。岡本地区における国道301号線は、幅員が狭く大型車のすれ違いに支障を来しているほか、通学路でありながら歩道が未整備など、交通安全上の問題を抱えており、地元住民などから道路改良の要望が出されていた。

こうした要望を受けて浜松市北土木整備事務所では、国道301号線の改良工事を順次進めており、岡本交差点以東を対象に道路の拡幅が行われている。岡本地区の段丘上には多数の遺跡が存在し、国道301号線の改良工事に関わる遺跡の試掘・確認調査が行われて来た。2012年5月には初生衣神社西側で神目代屋敷跡の発掘調査が実施され、古代から近世の遺構と遺物を検出した。

2013年には、国道301号線岡本交差点と接続する市道の改良計画が示され、市道拡幅部分が村上遺跡と神戸遺跡の範囲内に含まれることから、2013年6月20日に範囲確認調査を実施した。その結果、中世から近世の遺物が出土し、市道拡幅予定地の地下に遺跡が残存していることが明らかになった。また、岡本交差点に接した部分は、当初は遺跡の範囲外であったが、2013年8月1日に試掘調査を実施した結果、遺跡が交差点付近まで広がっていることが明らかになり、市道拡幅予定地の全域が発掘調査の対象となった。

村上遺跡の発掘調査は、浜松市（土木部北土木整備事務所）の依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。現地調査は2013年7月1日から7月2日と2013年9月24日から10月3日の2期に分けて66㎡を対象に行った。

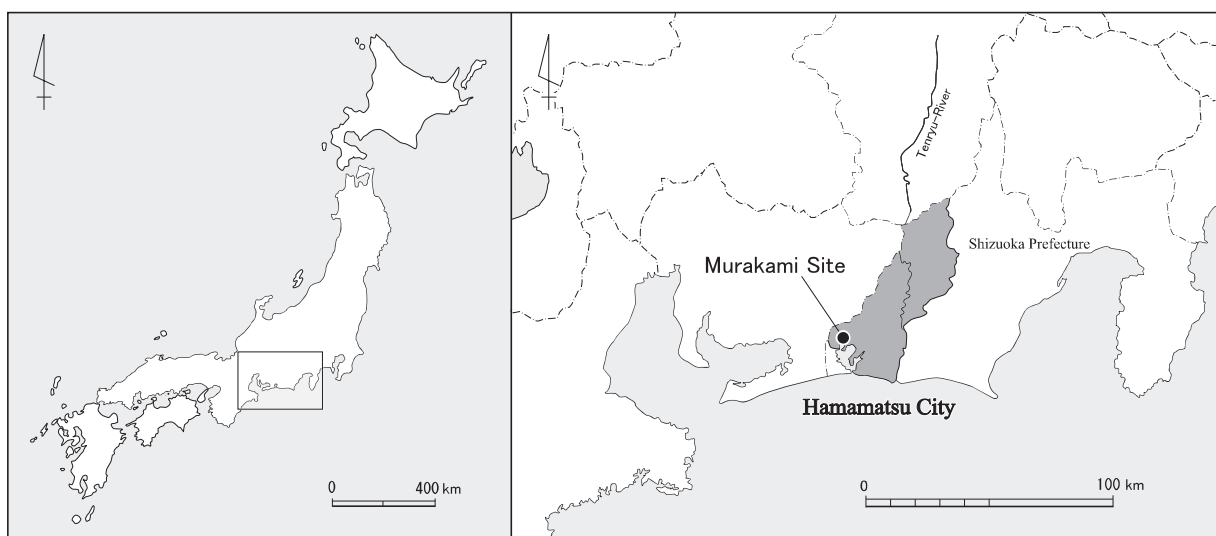


Fig.1 村上遺跡の位置

2 調査の方法と経過

調査区の設定 国道 301 号線の道路改良工事に伴い、対象地の発掘調査を行った。市道岡本御園線を境として、西側が村上遺跡、東側が神戸遺跡である。村上遺跡の発掘調査は 2 度に分けて実施したため、調査対象地のうち、南半を A 区、北半を B 区とした。

現地調査 村上遺跡の発掘調査は、2013 年 7 月 1 日～7 月 2 日（A 区）と 2013 年 9 月 24 日～10 月 3 日（B 区）の 2 期に分けて実施した。

A 区では、古代の小穴群や谷状地形を検出し、小穴内からは、埋設された手捏ね土器や土師器甕が出土した。また、古墳時代後期から平安時代前半、平安時代後半から鎌倉時代、室町時代から江戸時代までの遺物を含む、3 面の包含層を確認した。

B 区では、古代の小穴、近世の遺物を多量に含む遺構、A 区で検出した谷状地形の北側延長部分を検出したほか、古墳時代後期から平安時代前半までと、平安時代後半から鎌倉時代までと捉えられる 2 面の遺物包含層を確認した。

神戸遺跡の発掘調査は、2013 年 6 月 20 日に実施し、古代から中世前半の包含層と 2 段の平坦面、土坑、小穴を確認した。

なお、現地発掘調査には、石山勝弘と伊藤敏文が参加した。

整理作業 浜松市埋蔵文化財調査事務所において、各調査が終わり次第、整理作業を実施した。

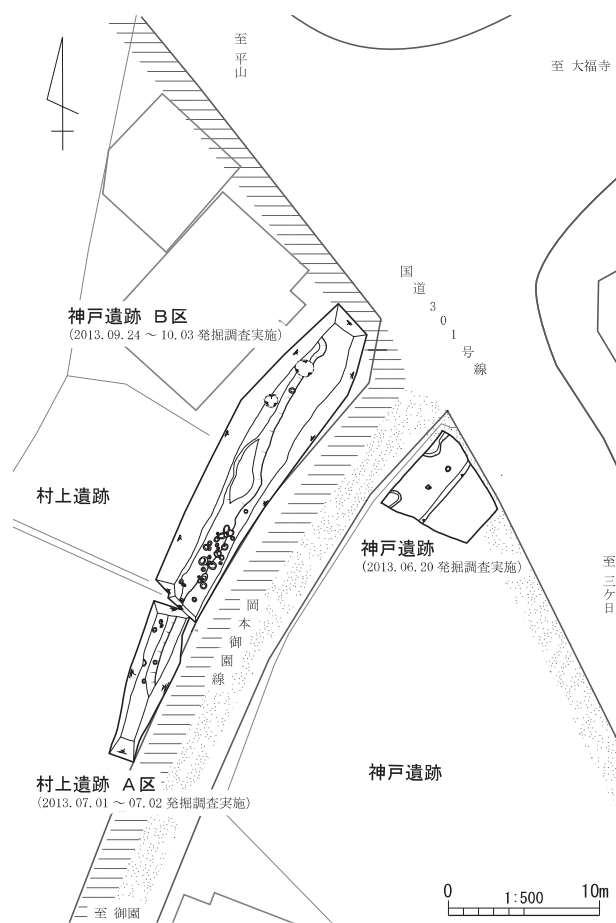


Fig.2 調査区位置図



Fig.3 調査対象地の近景 (A 区)

3 遺跡をめぐる環境

(1) 地理的環境

村上遺跡が所在する北区三ヶ日町は、浜名湖北岸に位置し、南には浜名湖の支湖である猪鼻湖を臨む。北・東・西の3方を赤石山脈から連なる山々に囲まれ、それぞれの河川流域ごとに、小規模な平野が広がっている。村上遺跡は、猪鼻湖沿岸部において最大の河川である釣橋川とその支流である宇利山川に挟まれた段丘上に位置する。

岡本地区には新城方面へ向かう国道301号線が通り、岡本地区南側の低地部には、豊橋方面へ抜ける道（古代の二見道、中世以降の本坂道）がある。岡本地区はこれらの主要道に囲まれ、西遠江と東三河を繋ぐ東西交通の要衝といえる。

(2) 歴史的環境

これまで、三ヶ日町域において実施された発掘調査は少なく、遺跡の詳細は不明な点が多い。しかし、浜松市文化財課が実施した三ヶ日町域における遺物の分布調査により、遺跡の分布状況と概要を窺い知ることができる。

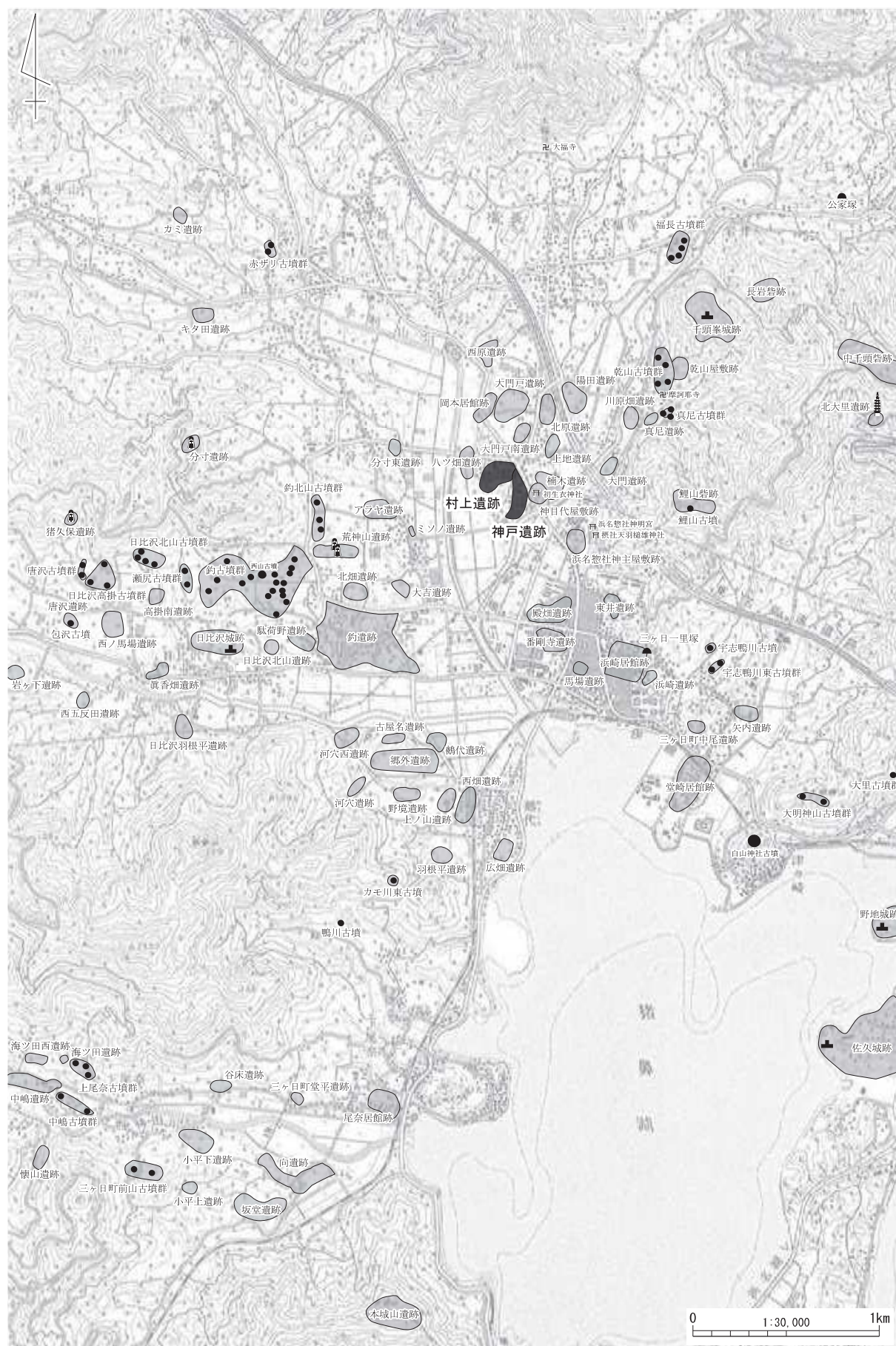
縄文時代 縄文時代の遺跡は、縄文時代早期の化石人骨が出土した只木遺跡のほか、殿畑遺跡などが知られる。今回、発掘調査を実施した村上遺跡においても、石器が出土しており、段丘上の広範囲にわたり、縄文時代の遺跡が展開していたことが窺える。

弥生時代 村上遺跡が所在する宇利山川東岸における弥生時代の遺跡は、低位段丘上に展開する八ツ畑遺跡のみが知られ、釣橋川東岸には、殿畑遺跡や番剛寺遺跡がみられる。しかし、多くの弥生時代の遺跡は、宇利山川西岸域や日比沢川流域の低位段丘上に偏在する傾向が認められ、釣遺跡などが知られる。また、分寸遺跡や荒神山遺跡、猪久保遺跡から合わせて4口の銅鐸が発見されていることから、弥生時代における拠点は、宇利山川西岸と日比沢川流域であったとみられる。

古墳時代 前期古墳は確認されていない。白山神社古墳は、立地や墳丘の状況からみて古墳時代中期の可能性がある。しかし、古墳が盛んに築造されるのは古墳時代後期以降のことで、平野を臨む段丘上に、多くの古墳が築造された。特に、宇利山川西岸や日比沢川北岸を中心として展開する釣古墳群は、市指定史跡として保護されている西山古墳をはじめ、50基を超える古墳が存在したといわれ、猪鼻湖沿岸部において最大の古墳群を形成した集団の存在が窺える。また、遺存している石室は、いずれも三河地域の石室との関連性が指摘され、当時の地域間の関わりを知る上でも興味深い。古墳時代の遺跡分布は、弥生時代中期以降と同様に宇利山川西岸域を中心に分布するが、古墳時代後期以降には、村上遺跡が所在する宇利山川東岸の段丘上にも遺跡の展開が認められる。

奈良時代 北区三ヶ日町は、遠江国浜名郡内にあたり、浜名郡内には、「和名類聚抄」から6～8郷の存在が知られる。さらに、「浜名郡輪租帳」や伊場遺跡群出土木簡にみられる郷名を加えると、最大で10郷を数える。

村上遺跡が所在する岡本地区は、英多郷もしくは坂下郷（静岡県1994）に比定される。村上遺跡の北東約150mの位置には、7世紀末から8世紀前半に位置づけられる瓦が数多く出土した楠木遺跡が所在し、この周辺に古代寺院が存在した蓋然性が高い。また、釣橋川を挟んで東側には、式内社である英多神社（現在の浜名惣社神明宮に比定）や8世紀後半から9世紀前半の瓦塔が出土した北大里遺跡の存在が知られており、宗教関連施設が集中していたことが窺える。



平安・鎌倉時代 三ヶ日町域には、伊勢神宮が領有する浜名神戸が広がり、神戸司は代々、大中原氏が務めたことが知られる。浜名神戸やその周辺には4つの御園と3つの御厨が所在した。なかでも、初生衣神社は伊勢神宮に神御衣を調進する儀礼を執り行っていたことが伝わり、現在は市指定有形民俗文化財として、織殿や古式織具などが保存されている。

平安時代初頭には、眞萱寺や幡教寺といった山林寺院が相次いで建立されたと伝わり、それぞれを前身とした摩訶耶寺と大福寺が、平安時代末から鎌倉時代にかけて現在の地に建立されている。

室町・戦国・江戸時代 南北朝時代の動乱期には、井伊谷城を拠点とした南朝方に与し、争乱の舞台になったとされる千頭峯城がある。発掘調査により、戦国時代に利用されていたことが明らかにされている。南北朝の争乱以降、北朝に与した浜名氏が三ヶ日町域を治め、浜名湖北岸域における一大勢力となった。浜名湖北岸から東三河へ抜ける交通の要衝にあたり、街道沿いには、城や砦、居館が数多くみられる。また、海上交通の要所には野地城や佐久城をはじめとした湖岸の城が築かれている。江戸時代には、浜松藩に属し、浜名湖北岸を貫く本坂道（姫街道）が、太平洋岸を通る東海道の別道として利用されている。

明治時代以前の景観 岡本地区の景観は明治時代前半までとそれ以降で大きく変化している。現在、岡本地区を貫く国道301号線は静岡県湖西市と愛知県新城市方面を繋ぐ主要道路として機能し、日常生活に欠かせない交通網となっている。

しかし、国道301号線の原型となる街道が現行の経路に整備されたのは、1895年（明治28年）に実施された改良工事以降である（三ヶ日町1979）。改良工事以前の道路交通網や地割は、国道301号線の改良工事以前に作成された公図（浜松市立中央図書館所蔵）から窺い知ることができる。この公図と現在の岡本地区の地図を合成すると、元々の経路を踏襲した道がみられるとともに、改良された国道301号線とそこから派生する道路のように、従来の街区を改変した道が見受けられる。村上遺跡所在地を含む国道301号線沿いは、改変が顕著といえ、留意しておく必要がある。

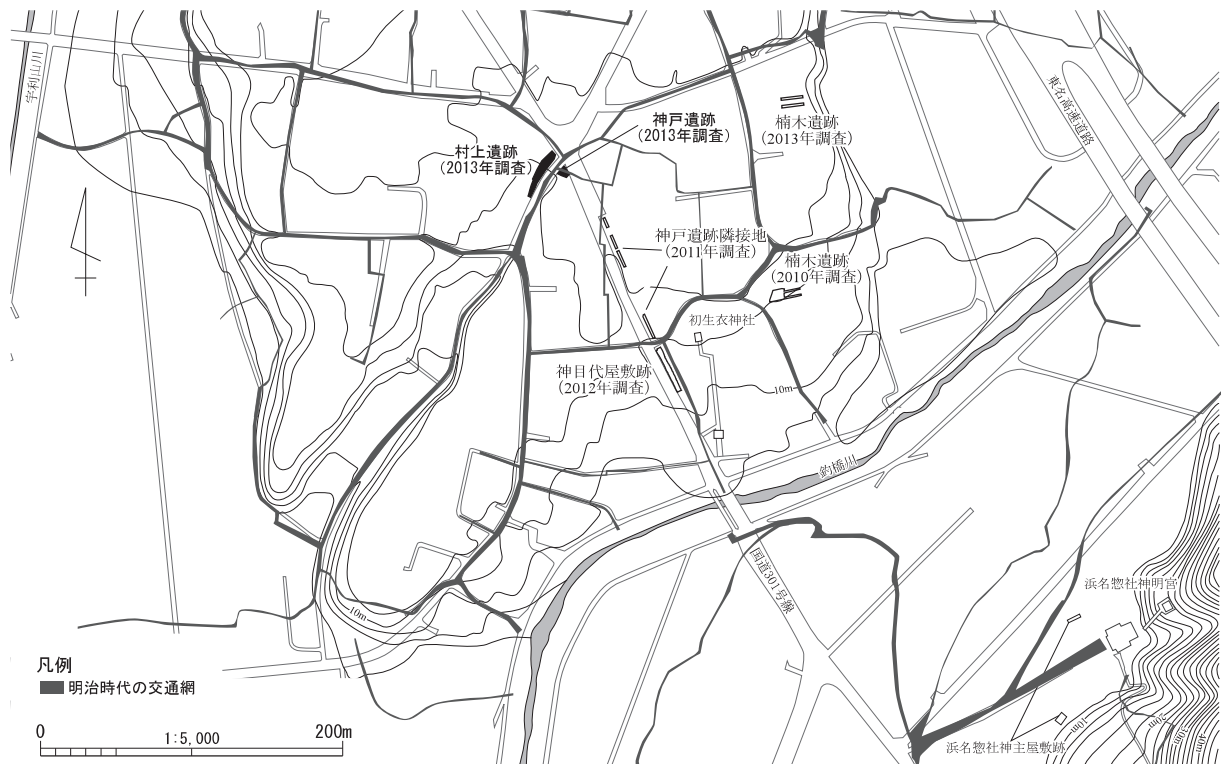


Fig.5 村上遺跡とその周辺の道路網

4 村上遺跡周辺の調査履歴

村上遺跡の周辺では、近年、開発に伴う発掘調査を中心に多くの調査が行われ、古代から中世前期を中心とした時期の様相が明らかになりつつある。調査成果を概観し、まとめておきたい。

浜名惣社神主屋敷跡 2005 年、浜名惣社神明宮の社務所周辺などから、奈良時代から鎌倉時代の土器が出土している。明確な遺構は確認されていないが、遺物が本殿に近い場所から出土しており、浜名惣社神明宮の前身とされる英多神社に関連する可能性が指摘されている（浜松市教委 2011）。

楠木遺跡 楠木遺跡は釣橋川西岸の段丘上に位置し、古代の瓦が散布していることが知られていた。2010 年に遺跡の実態を確認するため試掘調査が行われ、7 世紀末から 8 世紀前半に位置付けられる大量の瓦が出土した。このほか、基壇状の高まりや石組、小穴群が検出された。小穴の時期は出土遺物から中世以降のものと想定される。瓦は、三河に所在する医王寺廃寺との類似性が指摘されている（浜松市教委 2011）。寺院の存在を明確に示す遺構は確認されていないが、焼土や窯壁などは認められず生産遺跡の可能性は低いといえ、近傍に寺院が存在したと捉えられよう。

神目代屋敷跡 神目代屋敷跡は、釣橋川西岸の段丘上に位置し、隣接する初生衣神社の神目代が暮らした屋敷が所在したとされる遺跡である。2012 年、国道 301 号線の拡幅工事に伴い発掘調査が行われ、遺構が検出されたほか、古代から中世の遺物が出土した（浜松市教委 2014）。

神戸遺跡隣接地 2011 年、国道 301 号線改良工事に伴い発掘調査を実施した。少量の灰釉陶器片が出土しているが、遺跡の範囲外と判断される（浜松市教委 2013）。

小 結 村上遺跡が所在する釣橋川流域の岡本地区とその周辺には奈良時代以降を中心とした遺跡が集中的に分布し、近年の発掘調査により、その実態が明らかになりつつある。なかでも、宗教関連遺跡の密度が高く、地域における宗教拠点であったことが窺える。

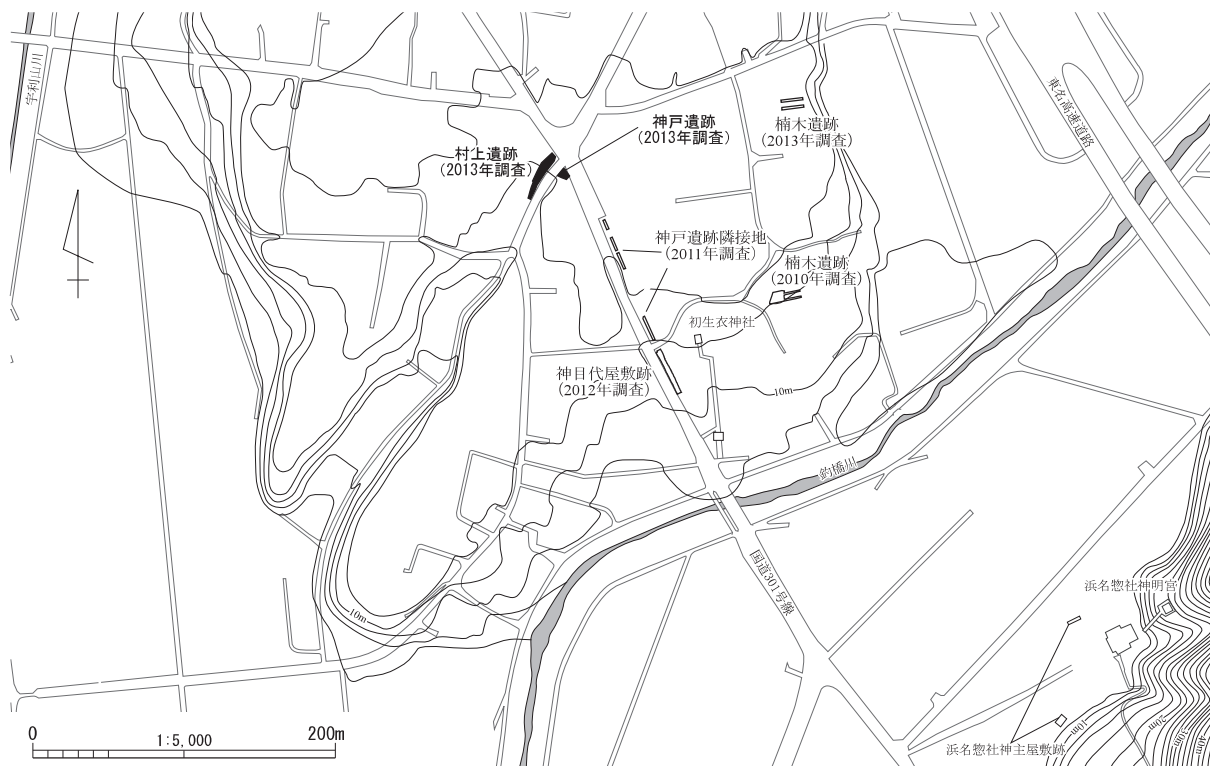


Fig.6 村上遺跡とその周辺の調査状況

第2章 調査成果

1 村上遺跡の調査成果

(1) 概 要

縄文時代と古墳時代後期から近世にかけて営まれた遺跡である。調査区の全域において、奈良時代から平安時代前半を中心とした時期の小穴や谷状地形を検出した。また、江戸時代後期の陶器や土師質土器が数多く出土した遺構（SX01）を検出した。このほか、古墳時代後期から江戸時代にわたる3面の遺物包含層を確認した。

(2) 村上遺跡の層位

確認できた層は上位層から、盛土（a-a'断面1層）、暗黄褐色の耕作土（3層上面）、室町時代から江戸時代にいたる遺物を含む暗黄褐色砂質土（3層下面：上位包含層）、灰褐色粘質土や黒褐色砂質土（4・5）、平安時代から鎌倉時代にいたる遺物を含む褐色砂質土（7：中位包含層）、谷状地形の埋土で、縄文時代や古墳時代後期から平安時代前半にいたる遺物を含む暗灰褐色や暗褐色の砂質土（10・11：下位包含層）、黄褐色砂礫土の基盤層（14）がみられる。また、東壁では、中位包含層堆積以前の整地土と捉えられる小礫混じりの暗黄褐色砂質土（b'-b'断面：10）や、近世の遺物が数多く出土した暗褐色礫土（b-b'断面5：SX01）がある。

(3) 検出遺構

小 穴 42基の小穴が検出された。このうち、遺物が伴い時期が明確にできるものは、SP02・03・14の3基のみであり、いずれも奈良～平安時代初頭に位置づけられる。なお、SP02・03は土器埋設遺構と捉えられる。

SX01 B区南半東側において、江戸時代後半を中心とした時期の遺物と20cm大の亜角礫が大量に含まれる部分が認められた。検出面積が限られるため、遺構の規模は不明だが、少なくとも7m以上あり、整地層や大型の廃棄遺構の可能性もある。

谷状地形 調査区の西半から南北方向に縦断する状態で谷状地形が検出された。谷状地形の始点はB区北端で確認でき、谷状地形の幅は不明だが、深さは検出面から最大で0.3mを測る。この谷状地形は、下位包含層に埋められており、平安時代前半にかけて埋没したことが窺える。なお、谷状地形は調査時に、一定量の湧水が確認でき、小川であった可能性もある。

(4) 遺物の出土状況

小 穴 SP02では、手捏ね土器が2個体、正位の状態で出土した。SP03では、土師器甕が正位で埋設された状態で出土した。SP14では、須恵器の有台盤が埋土に含まれていた。谷状地形の埋土中にも同一個体の破片がみられ、小穴が完全に埋まる前に流れ込んだものと想定される。

SX01 江戸時代後半の陶器や内耳鍋を中心とした土師質土器が破損した状態で複数出土した。全形が窺えるものは含まれているが、完形に復元できるものはみられない。

包含層 遺物は、下位包含層や中位包含層、上位包含層から破片の状態で出土した。出土位置に法則性は認められないが、それぞれの包含層ごとに時期的なまとまりをもって出土した。

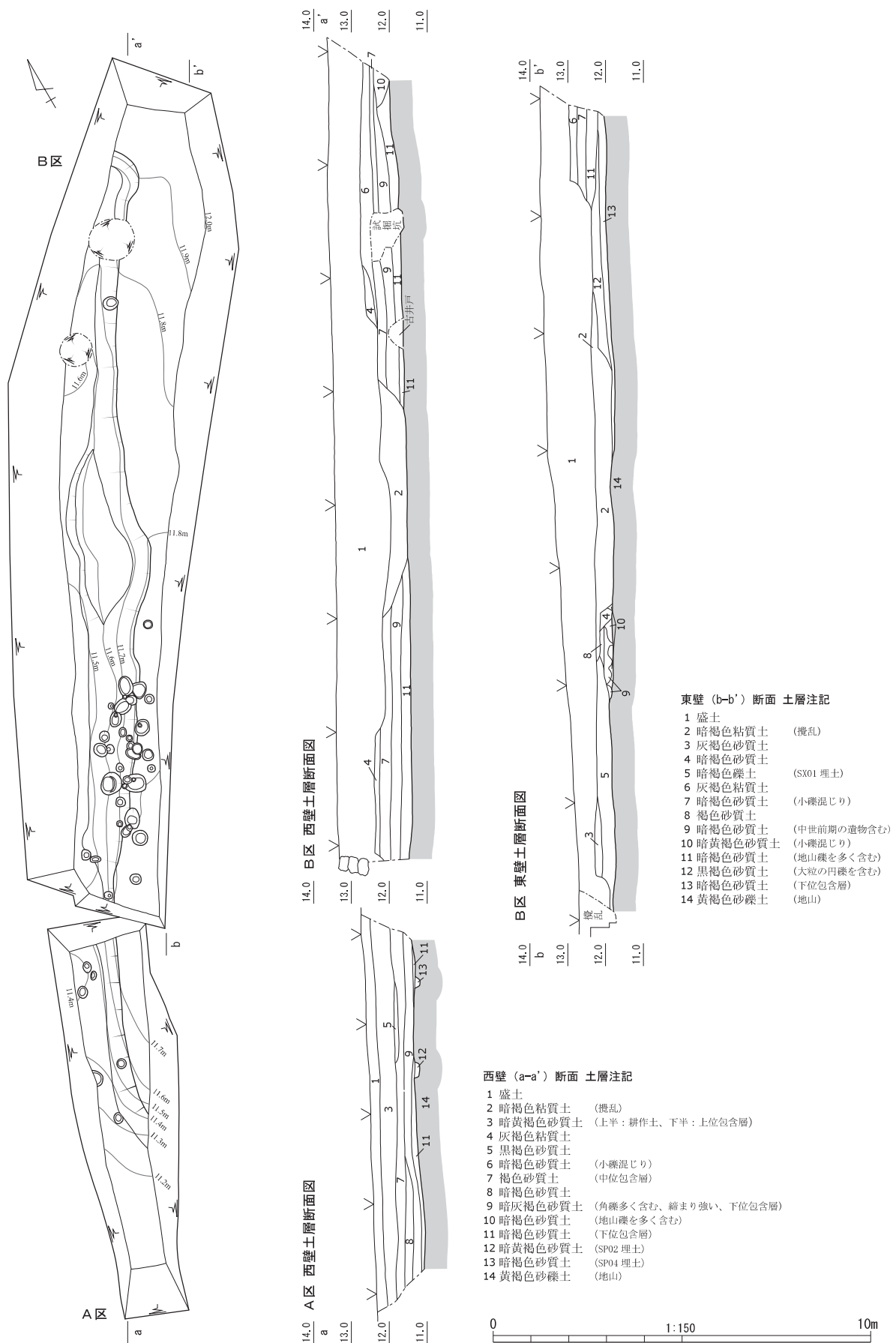


Fig.7 村上遺跡 全体図

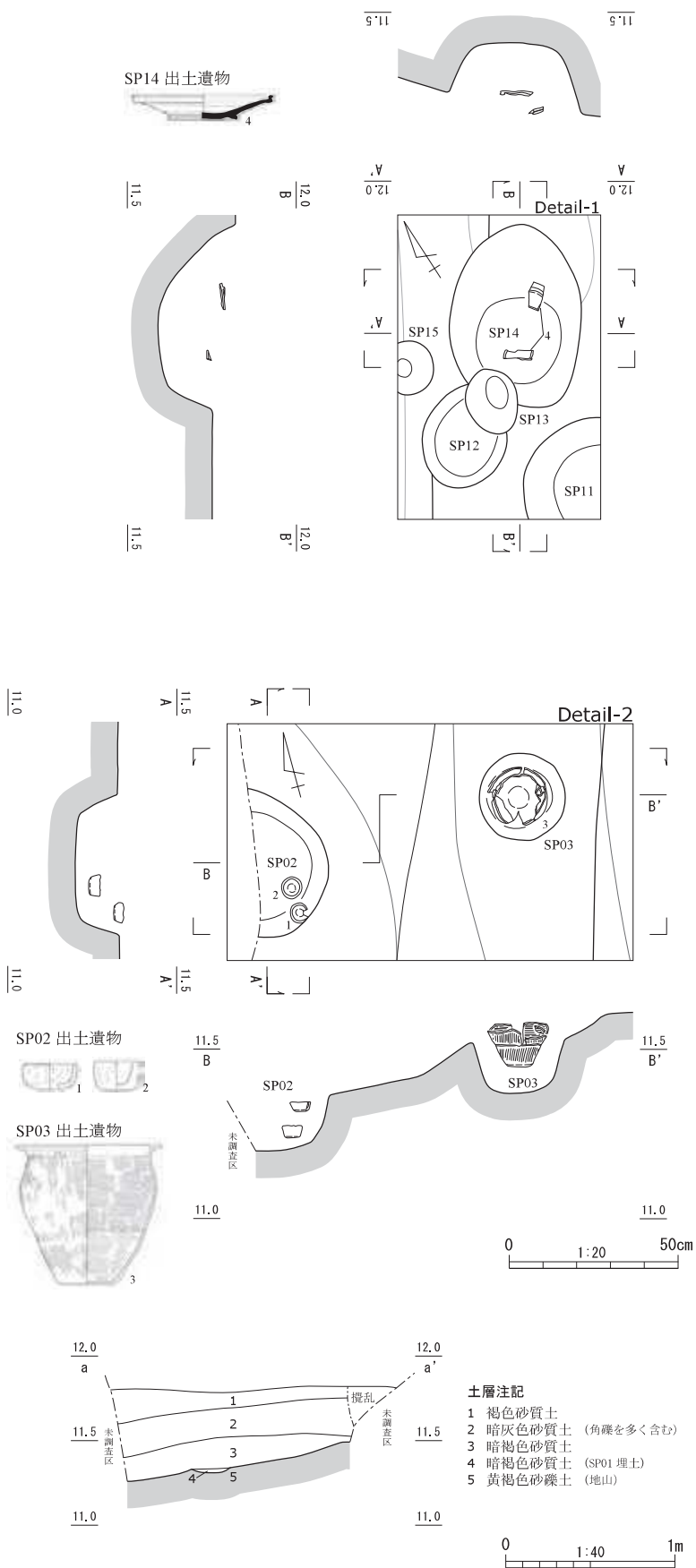
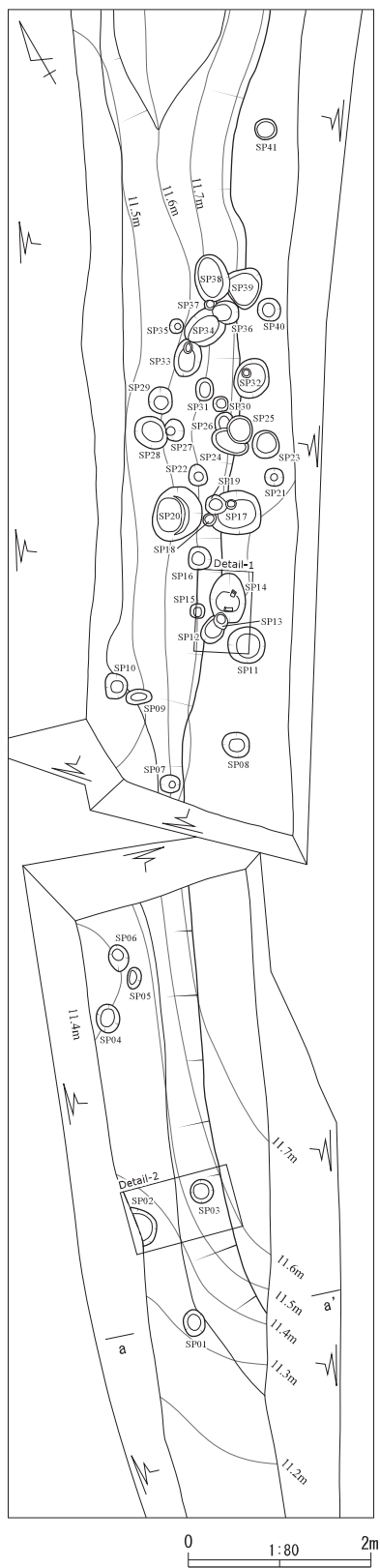


Fig.8 村上遺跡 詳細図

（５）出土遺物

概要 縄文時代と古墳時代後期から近世にいたる遺物が出土した。古墳時代後期から近世にいたる遺物は一定量出土しており、調査区における遺跡の存続時期の中心は古墳時代後期から江戸時代後半にかけてといえる。

SP02 出土遺物 (Fig.10) 手捏ね土器が正位の状態で２個体出土した。１は、橙色を呈し、口径 6.5cm、器高 2.9cm である。２は完形で、浅黄橙色を呈し、口径 5.4cm、器高 3.4cm である。

SP03 出土遺物 (Fig.10) 土師器甕（３）が正位で埋設された状態で出土した。口径 17.4cm、胴部最大径 16.1cm、底径 6.2cm、器高 16.4cm を測る。にぶい黄橙色に焼き上がり、内外面の一部に黒斑が認められる。ススやコゲなどの使用痕は認められない。口縁部の外反が強く、口縁端部は受口状であることから、９世紀代と捉えられる。なお、谷側にあった口縁部が欠損し、破断面には摩滅が認められる。埋設されたのち、一定期間は地表に露出していたとみられる。

SP14 出土遺物 (Fig.10) 須恵器の有台盤（４）が小片の状態で出土した。残存率は 20%程度だが、全形を窺い知れ、口径 16.8cm、器高 2.9cm、高台径 8.4cm に復元できる。稜が鋭く、器面は平滑で、細かなクロクロ目が認められる。また、色調は灰黄褐色を呈すなど、猿投窯産の特徴をよく示している。口縁端部は外方へ摘み出し、高台の形態は低く、外端接地し、外傾する端面には匙面をもつ。高台径／口径×100＝「50」であり、猿投窯編年（尾野 2001）のⅥ期古段階（IG-78 窯式期：9世紀前半）と捉えられる。なお、この有台盤と同一個体のものが、B 区西壁 9 層からも出土している。

SX01 出土遺物 (Fig.11) 12～13 世紀の渥美窯産の壺（５）や江戸時代の土師質土器（６～17）と陶器（18～27）が出土し、23 点を図示した。５は渥美窯産の壺である。肩部の破片で、外面には自然釉とヘラ状工具による線刻がみられる。色調は内外面ともに黒色を呈しているが、２次被熱によるものと埋没中に染みついた色といえる。

６～13 は半球形内耳鍋である。このうち、全形が窺えるものは 6 のみである。色調は浅黄橙色のものが主体をなし、橙色や灰白色を呈するものも散見されるが、器形などとの相関性は認められない。いずれのものにも外面にはススの付着が認められる。6 は口径 24.2cm を測り、外面下半にはケズリ調整が施されている。口縁部が内湾するもの（６～11）と直立するもの（12・13）があり、17 世紀後半から 18 世紀前葉に位置づけられる。14・15 は羽無釜であり、いずれも浅黄橙色を呈す

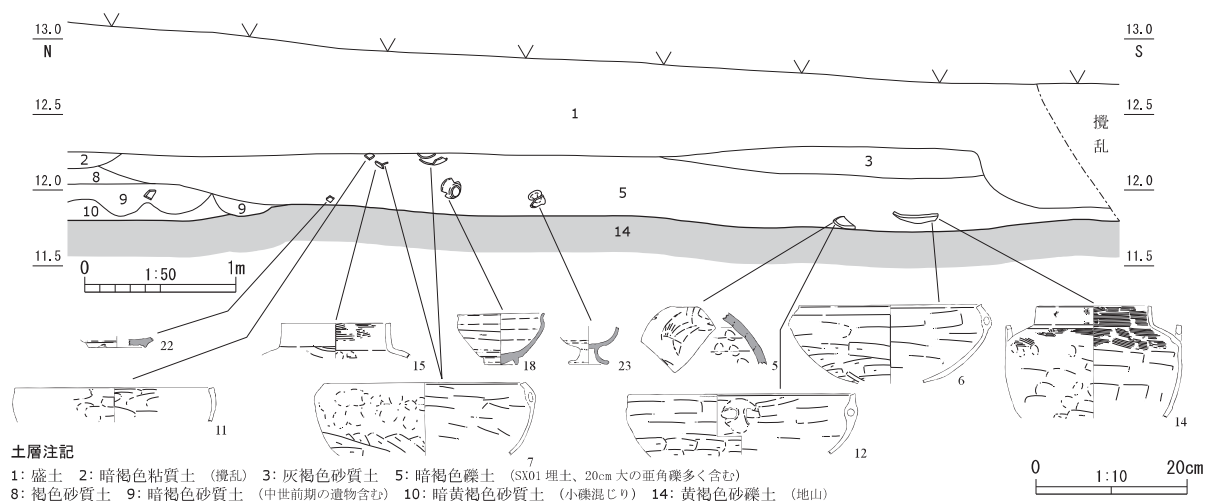


Fig.9 SX01 遺物出土状態図

る。14 は概ね全形を窺い知ることができ、口径 15.4cm、最大径 23.4cm である。肩部に五角形の粘土板を垂直に貼り付け、口頸部に直交する方向に孔を開け、外耳をつくり出している。胴下部から肩部の外面には、ススの付着がみられる。17 世紀以降と捉えられる。15 は口径 14.4cm に復元できる。16・17 は非ロクロかわらけで、口径はそれぞれ 12.2cm と 10.0cm と推定でき、色調はいずれも浅黄橙色である。

18 は瀬戸産の天目茶碗で、口径 11.6cm、器高 6.8cm、高台径 4.3cm を測る。高台の特徴から登窯第 4 小期に位置づけられる。19 は志野の向付で、口径 11.2cm、器高 3.8cm、高台径 6.2cm を測り、大窯第 4 段階後半に位置づけられる。20・21 は美濃産の尾呂茶碗で、口径はそれぞれ 11.4cm と 11.7cm を測り、登窯第 5～6 小期に位置づけられる。22 は美濃産の反皿で、高台径 7.6cm を測り、登窯第 4～5 小期に位置づけられる。23 は美濃産の仏餉具で、脚径 5.4cm を測り、登窯第 6 小期に位置づけられる。24・25 は志戸呂産の播鉢で、24 は口径 26.2cm を測り、口縁端部に水平な面をもつ。25 は底部で底径 10.0cm を測る。いずれも 17 世紀前半と捉えられる。26・27 は瀬戸産の播鉢である。26 は口径 34.0cm を測り、口縁部形態の特徴から登窯第 4 小期に位置づけられる。27 は口径 37.6cm を測り、口縁部形態の特徴から登窯第 6 小期に位置づけられる。

SX01 からは、12～13 世紀の渥美窯産の壺、17 世紀前半の志戸呂窯産の播鉢、17 世紀後半～18 世紀前葉の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。SX01 出土遺物のうち最も新しい時期のものは、18 世紀前葉といえ、SX01 の形成時期もこの時期に求めてよい。

下位包含層出土遺物 (Fig.12) 縄文時代の石器や石核、古墳時代後期～平安時代前葉の土師器や須恵器が出土した。28 は黒曜石製の凹基無頸式の石鏃である。29 はチャートの石核である。

土師器は碗 (30) と甕 (31・32) が出土した。碗 (30) は内外面ともに赤彩され、口径 14.0cm に復元できる。甕 (31) は、暗灰黄色を呈し、口径は 30.4cm に復元できる。口縁部の外反が強く、8 世紀代の所産と捉えられる。32 は、口径 25.0cm に復元できる。口縁部は外反し、口縁端部は受口状を呈することから 9 世紀代と捉えられる。

須恵器は 33～53 に示した。ほとんどが砂質の胎土で灰白～灰色を呈し、湖西窯産と捉えられるが、異なる産地が想定される場合には個別に示す。有台坏身 (33～37) のうち、全形を窺えるものは

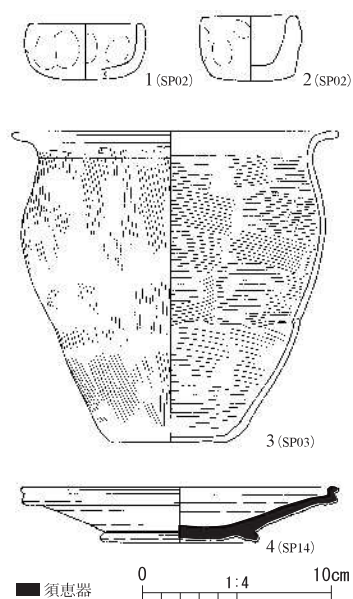


Fig.10 SP02・03・14 出土遺物実測図

33 のみである。33 は、口径 14.8cm、器高 3.9cm、高台径 11.6cm を測り、底部はやや丸底で、口縁部が底部境から屈曲して立ち上がる。高台は内端接地する角高台である。34～37 は底部で、高台径はいずれも 10cm 程度である。38 は碗の口縁部である。口径 13.2cm を測り、器面は非常に滑らかで、口縁端部は外反する。胎土は他の須恵器に比べ緻密な粘土質であり、表面の色調は青灰色、断面色調は褐灰色を呈する。これらのことから、猿投窯産と想定でき、9 世紀前半のものと捉えられる。39 は有台盤の底部で、底径は 14.0cm を測り、やや丸底状である。40 と 41 は高坏であり、40 は高坏の坏部、41 は高坏の脚部である。42 は甕の口縁部で口径 9.6cm を測る。口縁部内面には自然釉が認められ、外面は灰色を呈し、薄く降灰がみられる。7 世紀代のものと捉えられる。43～47 は壺類であり、43 は広口壺の口縁部で、口径 16.4cm を測る。44 は有台広口壺の底部で高台径は 15.9cm を測る。45・46 は有台長頸壺の底部で、高台径は 9.4cm と 8.0cm を測る。47 は無台長頸

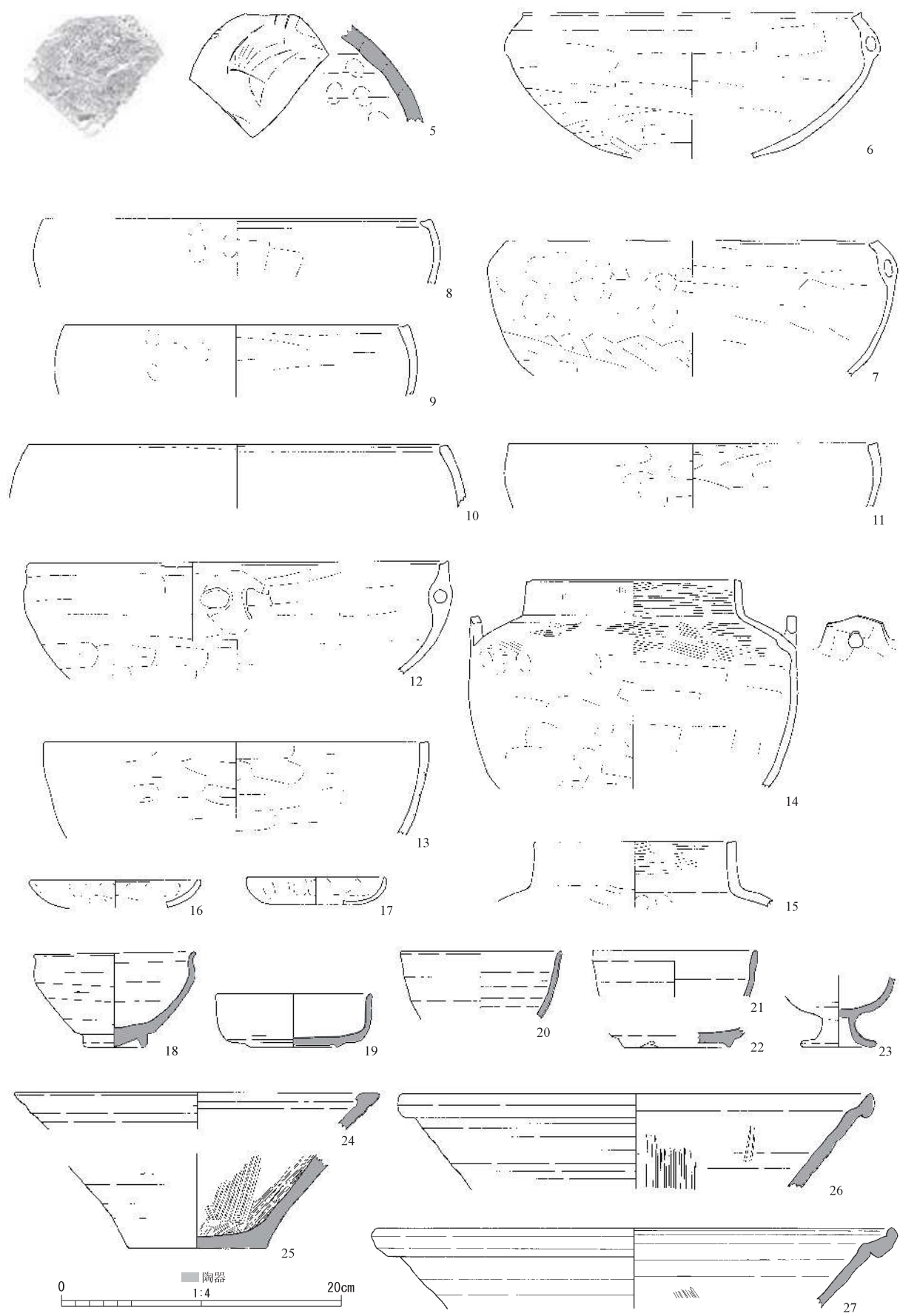


Fig.11 SX01 出土遺物実測図

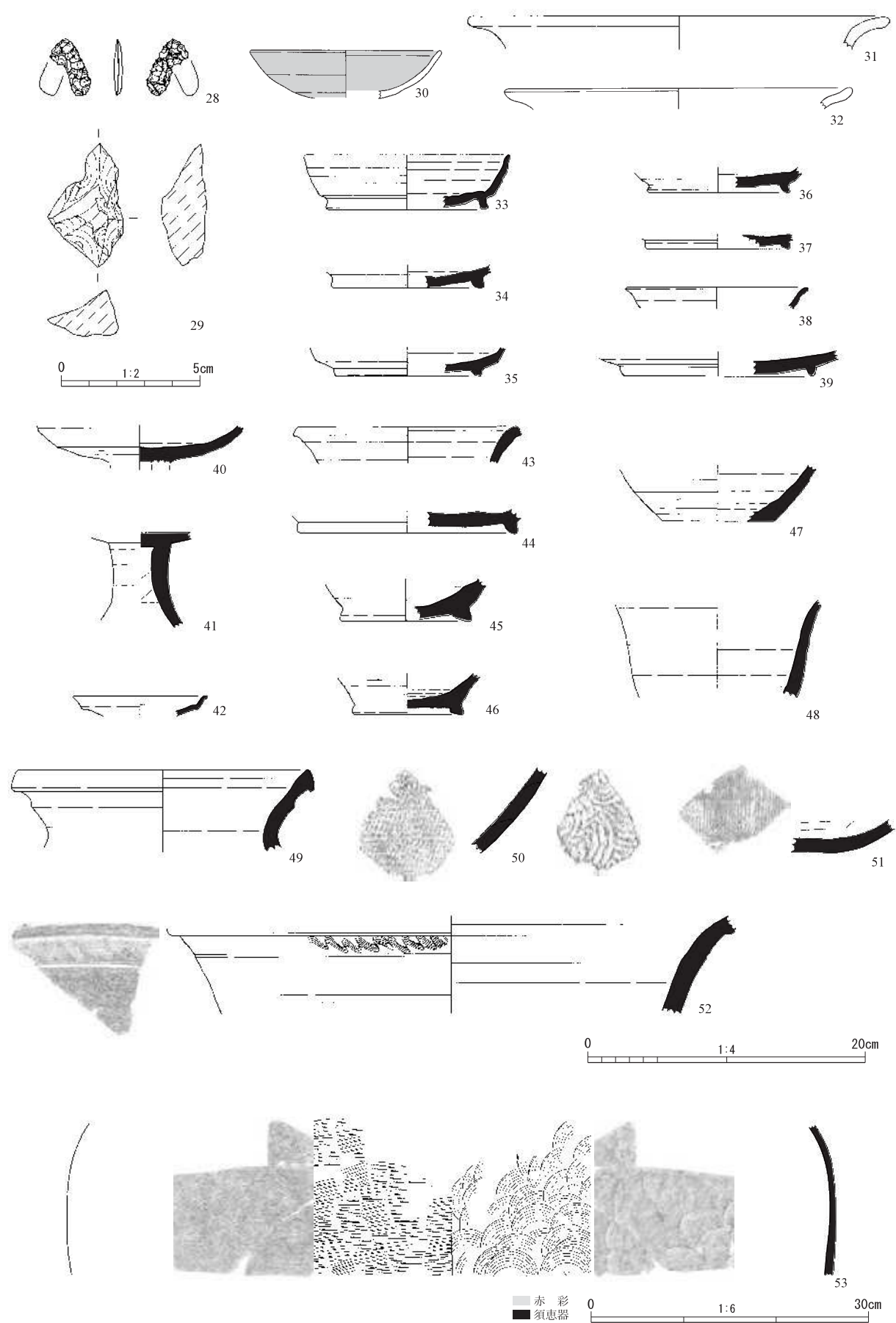


Fig.12 下位包含層出土遺物実測図

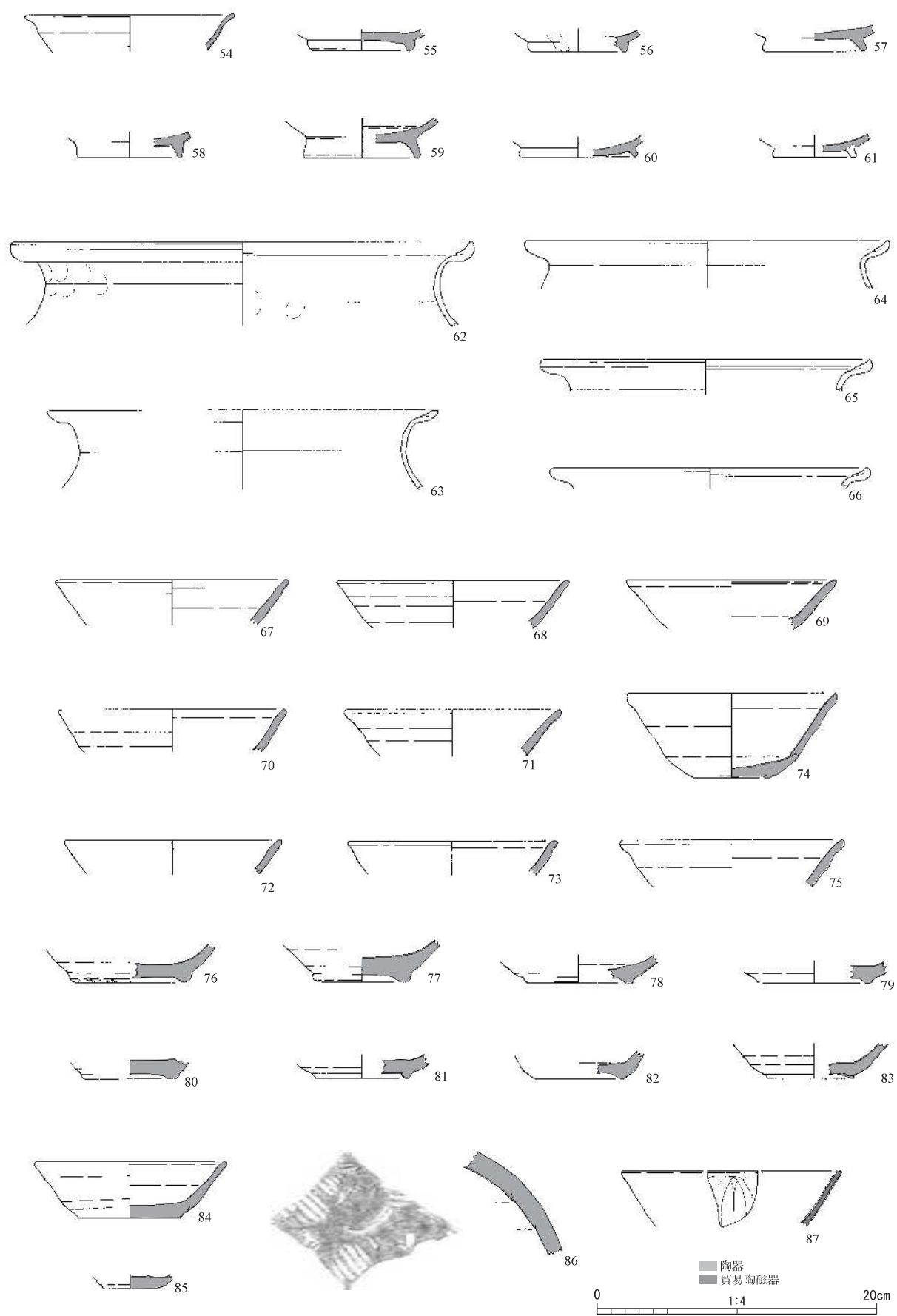


Fig.13 中位包含層出土遺物實測圖

壺の底部で、底径は 8.0cm を測る。48 は陶臼もしくは盥と想定される。内面下半に明瞭な摩耗が認められる。49 ～ 51 は中型甕であり、49 は口頸部で、口径は 21.8cm を測る。内外面ともに自然釉がかかり、灰オリーブ色を呈している。口縁端部は下方向へつまみ出され、頸部のやや上方には、断面半円形の凸帯がロクロナデによってつくり出されている。凸帯の形状や位置から 8 世紀代と捉えられる。50・51 は甕の胴部下半から底部にかけての破片である。50 は、灰色を呈し、外面に平行線文タタキ具痕と沈線、内面に同心円文アテ具痕がみられ、古墳時代後期と捉えられる。51 は灰白色を呈し、内面には降灰がみられる。外面は平行線文タタキ具痕がみられ、内面はナデ調整が施されている。52 は大甕の頸部である。頸部には断面半円形の凸帯が施され、その下方には 1 段の櫛描波状文がみられる。口縁部が欠損しているため、口径は不明だが 40 ～ 50cm 程度と想定できる。53 は大甕の胴部から肩部にかけての破片である。最大径は約 83cm に復元できる。外面には木目に直交するように平行線を刻んだタタキ具痕がみられ、内面には薄く同心円文を刻んだアテ具痕がみられる。

中位包含層出土遺物 (Fig.13) 灰釉陶器、土師質土器、中世陶器が出土した。灰釉陶器は 54 ～ 61 に示した。灰釉陶器はいずれも灰白色を呈している。54 は碗の口縁部で、口径は 15.0cm を測り、口縁部内面には施釉が認められ、K90 ～ O53 窯式期と捉えられる。55 ～ 60 は碗の底部で、高台径は 6.5 ～ 8.5cm を測る。底部はすべて糸切り無調整であり、高台の形態から 55・56 は O53 ～ H72 窯式期、57 ～ 59 は O53 窯式期以降、60 は H72 ～ 百代寺窯式期と捉えられる。61 は碗・皿類の底部で、底部は糸切り無調整である。灰釉陶器は小片のみであり時期を明確にしがたいが、O53 窯式期以降を中心としていることが窺える。

伊勢型鍋を 62 ～ 66 に示した。口径は 23.0 ～ 33.2cm を測る。色調はいずれも浅黄橙色を呈しており、外面にはススの付着がみられる。

中世陶器を 67 ～ 86 に示した。渥美・湖西窯産が主体といえ、産地が異なるものは個別に示す。67 ～ 73・75 には口縁部を示した。相対的に器厚が薄く、口縁端部がやや外反し古相のもの（67 ～ 69）と相対的に器厚が厚く、直線的で新相なもの（70 ～ 75）があり、口径は、15.0 ～ 16.8cm を測

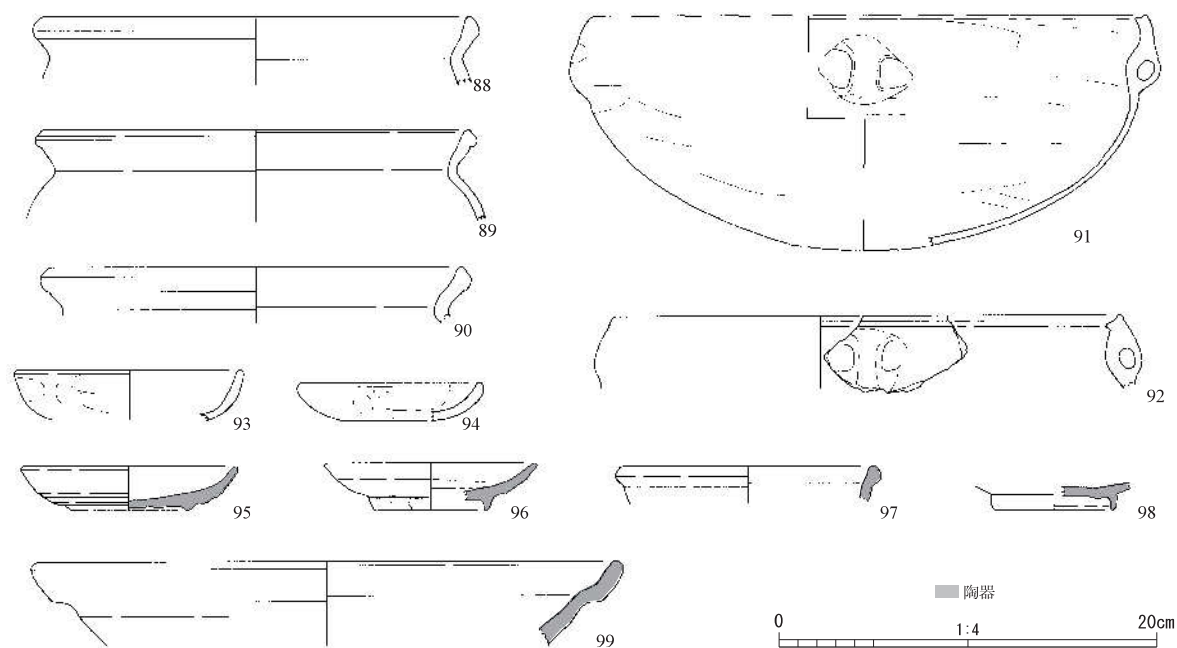


Fig.14 上位包含層出土遺物実測図

る。75 は形態や胎土の特徴から知多産といえる。74・76～83 は碗であり、このうち全形がわかるものは74のみである。74 は口径 15.0cm、器高 5.0cm、高台径 6.0cm を測る。胎土は粗く、2mm 大の礫が含まれている。また、高台が著しく低くなっているが器高は高いことから、知多産といえ、13 世紀後半と捉えられる。高台の断面形状は、角が丸い逆台形をしたもの（76～78）と、著しく低いもの（79～83）がある。高台径はいずれも 6.0～7.7cm を測る。なお、83 は胎土の特徴から知多産と捉えられる。84 は無台碗で、口径 13.8cm、器高 4.0cm、底径 7.2cm を測り、底部は未調整である。85 は小皿の底部である。碗・皿類はいずれも灰白色を呈している。86 は渥美窯産の甕で、外面には押印文がみられ、12 世紀代と捉えられる。中世陶器は渥美窯編年の 2a～3 期（安井 2012）のものと捉えられ、12～14 世紀前半にかけてのものといえる。

青磁碗を 87 に示した。口径 15.8cm を測り、全面に透明感のある青みがかった緑色の釉がかかっており、外面には鎬連弁文がみられる。釉や鎬連弁文の特徴から、南宋から元の時代（12 世紀末～13 世紀前半）と捉えられる。

上位包含層出土遺物（Fig.14） 土師質土器と陶器が出土した。土師質土器は 88～94 に示した。土師質土器はいずれも浅黄橙色～橙色を呈している。88～90 はくの字口縁内耳鍋である。いずれも口縁部片であり、口径は 22.8～23.6cm を測る。15～16 世紀のものと捉えられる。91・92 は半球形内耳鍋であり、91 は全形を窺い知ることができる。口径 29.2cm、復元高 12.4cm を測り、口縁部は内湾している。17 世紀後半以降の所産と捉えられる。92 は口径 26.6cm を測り、口縁部は内湾している。93・94 は非ロクロかわらけであり、口径はそれぞれ 12.1cm と 9.8cm を測る。

陶器は 95～99 に示した。95 は志野の丸皿で、口径 11.4cm、器高 2.3cm、高台径 6.0cm を測り、登窯第 2 小期に比定される。96 は志戸呂産の丸皿で、口径 11.2cm、器高 2.5cm、高台径 5.8cm を測り、17 世紀前半の所産と捉えられる。97 は、瀬戸産の碗類とみられ、口径 14.0cm を測る。登窯第 4 小期に比定される。98 は、瀬戸産の輪禿鉢で、高台径 6.6cm を測り、登窯第 7 小期（18 世紀中葉）に比定される。99 は、瀬戸産の搦鉢で口径は 31.2cm を測り、口縁部形態から登窯第 5 小期に比定される。

（6）小 結

42 基の小穴と谷状地形、SX01 を検出した。小穴のうち時期が明確にできるものは 3 基のみだが、いずれも 8～9 世紀代と捉えられる。また、谷状地形の埋土は下位包含層と同一の層と捉えられ、9 世紀代を目途に埋没したといえる。また、SX01 は 18 世紀前葉に形成された蓋然性が高い。

下位包含層は、7～9 世紀前半を中心とした時期に堆積した土層といえ、村上遺跡においてまとまった遺物量を確認できる最も古い時期といえる。また、縄文時代の石器が少量出土しており、縄文時代の遺跡が展開している可能性を示す遺物といえる。村上遺跡は、縄文時代に遺跡が展開した後、古墳時代後期まで空白期間があることを指摘できる。

中位包含層は、概ね 10～14 世紀にかけて堆積した土層と位置づけられる。中位包含層からは灰釉陶器や中世陶器に混ざって、貿易陶磁器（青磁碗）が出土しており、調査の進展とともに、遺跡の性格を明らかにする上で、注目すべき資料といえる。

上位包含層は、15～18 世紀にかけて堆積したと捉えられる。くの字口縁内耳鍋や非ロクロかわらけ、国産陶器が出土している。

村上遺跡は、古墳時代後期から奈良時代を中心とした時期に開発が始まり、現在に至るまで継続的に利用されていることが判明し、地域の動向を明らかにする上で重要な資料が得られた。

2 神戸遺跡の調査成果

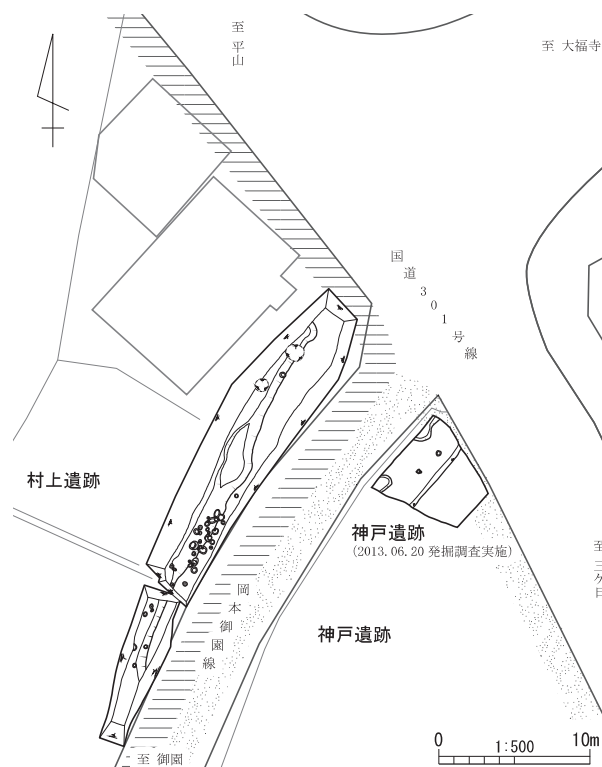


Fig.15 神戸遺跡 調査区位置図

(1) 概要

神戸遺跡は、村上遺跡の東側に所在する遺跡である。村上遺跡 B 区の東側に隣接する部分の発掘調査を行い、土坑 2 基と小穴 2 基を検出した。また、調査区の東と西で高低差をもって、2 つの平坦面が確認された。なお、包含層中からは土師器や須恵器、中世陶器が出土した。

(2) 神戸遺跡の層位

上から盛土 (1 層)、古代や中世前半の遺物を含む暗褐色粘質土 (2 層)、遺構の埋土である暗褐色粘質土 (3 層)、基盤層である黄褐色砂礫土 (4 層) が認められる。盛土は、最大で 0.7m ほど、施されている。

なお、調査区東側では、盛土の直下で基盤層が確認され、後世の地形改変による影響が顕著である可能性が高い。

(3) 検出遺構

調査区の中央を南北方向に横切る段差が検出され、東側の平坦面と西側の平坦面に分けられる。検出された遺構は、土坑 2 基と小穴 2 基であり、いずれも調査区西側の平坦面から検出された。

小 穴 2 基の小穴が検出され、SP01 に遺物から、土師器の小片が出土したが、この土師器から遺構の詳細な時期を求めることは困難である。しかし、検出面直上の包含層に含まれる遺物が須恵器および中世陶器に限られ、いずれの遺構も古代から中世前半のものと捉えて問題ないだろう。

土 坑 SK01 と SK02 は調査区西端の南側と北側からそれぞれ検出された。遺構の規模は大半が調査区外に伸びており不明だが、深さは検出面から約 0.2m である。土坑に伴う遺物はないが、検出面直上の包含層に含まれる遺物が須恵器と中世陶器に限られることから、古代から中世前半と捉えて問題ないだろう。

(4) 出土遺物

須恵器や土師器、中世陶器が包含層から出土した。このうち、図化が可能な須恵器の有台壺 1 点と中世陶器の碗 3 点を図示した。

包含層出土遺物 (Fig.16) 1 は、須恵器有台壺の底部である。外面は自然釉が薄くかかり、回転ヘラケズリが施され、底部と体部の境に高台が貼り付けられている。8 世紀代と捉えられよう。

2 ～ 4 は中世陶器の碗である。2 は、口径 15.0cm を測り、口縁端部は外反する。全体的に澄んだ灰白色を呈している。3 は、口径 16.8cm を測り、内面には自然釉がかかる。4 は底部で、高台径は 6.8cm を測る。2・4 は渥美窯編年の 2 期、3 は 3 期に位置づけられる。

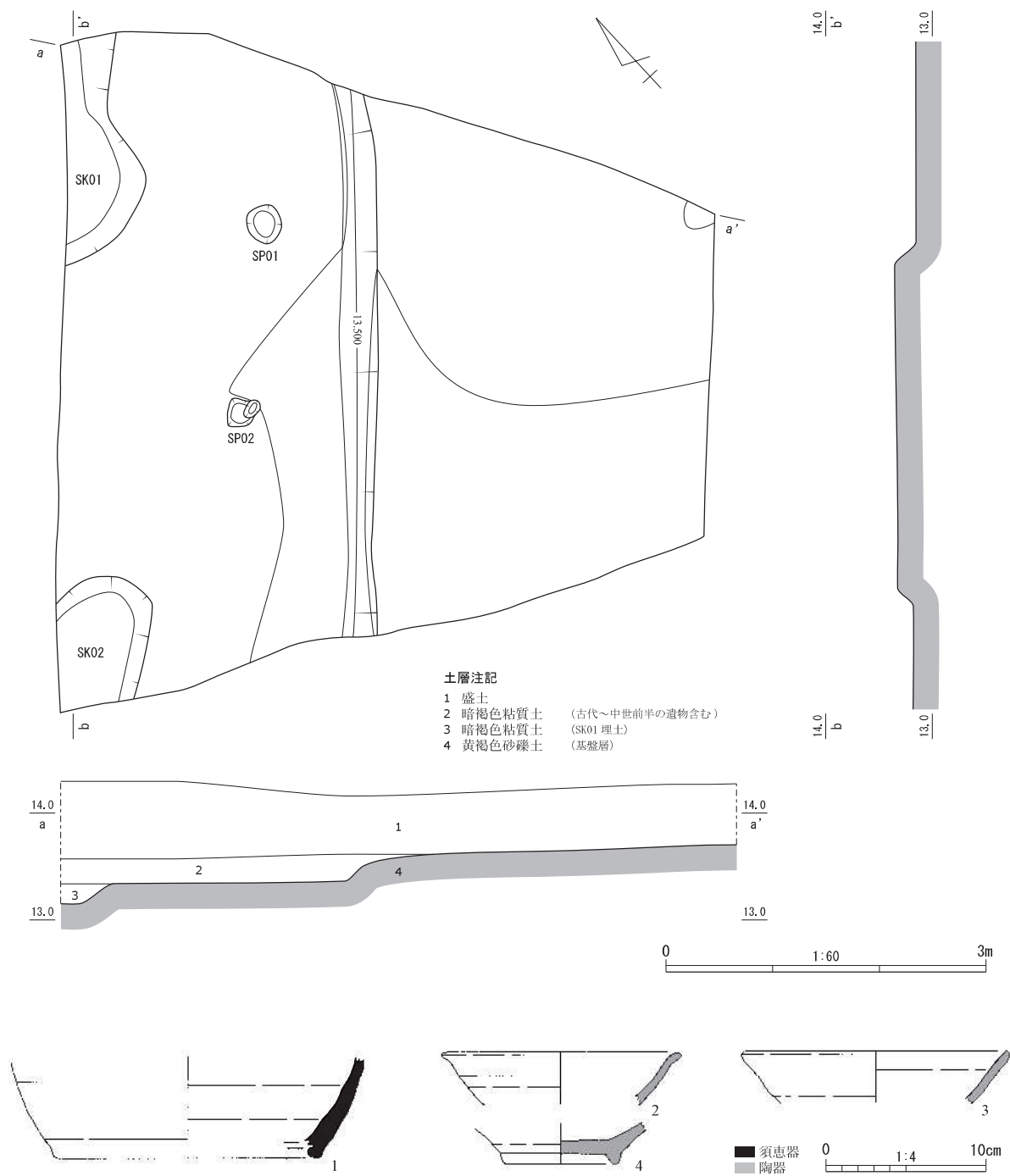


Fig.16 神戸遺跡 遺構実測図と出土遺物実測図

(5) 小 結

遺構や遺物は、調査区西側に偏って認められた。検出された遺構の時期を明確に示す遺物はないが、検出面直上の包含層からは、8世紀代の須恵器と12～13世紀の中世陶器が出土した。土坑や小穴の時期は明確にできないが、検出状況から考えると、古代から中世前期を中心とした時期の遺構と捉えられる。なお、遺構が検出された調査区西側の平坦面に比べて、標高が高い東側の平坦面からは、遺構が検出されなかったが、後世の地形改変により消失した可能性がある。また、隣接する村上遺跡B区の基盤層との高低差が約1.5m認められ、旧地形と土地利用を窺い知るうえで注目できる。

第3章 総括

(1) 調査成果

概要 村上遺跡と神戸遺跡の発掘調査により、古代を中心とした時期の遺構と古代から近世にかけての遺物が多数出土し、岡本地区の歴史を明らかにする上で有意義な情報が数多く得られた。村上遺跡と神戸遺跡の様相を層位や遺構、遺物の確認状況から、古代、中世、近世の3時期に分け、まとめておきたい。

古代 村上遺跡において、まとまった量の遺物が確認できた時期のうち、最も古いものは奈良時代を中心とした時期であり、下位包含層にあたる。また、3基の小穴内から遺物が出土し、いずれも8～9世紀代の遺物である。なお、村上遺跡A区で検出されたSP02（手捏ね土器埋設）やSP03（土師器甕埋設）は、8～9世紀代にかけて祭祀が執り行われた可能性を示している。また、遺物が出土していないほかの小穴についても、層位からみて、同時期のものである蓋然性が高い。これらの小穴の性格については調査面積が限られることから不明である。このほか、谷状地形についても、8世紀を中心とした時期に形成し、9世紀のうちに埋没したことが窺える。

中世 確実に中世の遺構と認められるものはないが、古代から中世にかけて、村上遺跡調査地と神戸遺跡調査地の間には約1.5mの高低差があったことが判明した（Fig.17）。だが、地形の変換点が想定される岡本御園線の下は調査区外であり、詳細は不明である。しかし、明治時代に作成された公図を参考にすると、現在の岡本御園線と同様に南北方向へ道路があった可能性がある。出土遺物は、中世陶器や土師質土器に加え、貿易陶磁器（青磁碗）がある。村上遺跡とその周辺に威信財的な要素をもつ器財を所有できる人物・集団が所在した可能性を示しているといえよう。村上遺跡の周辺には初生衣神社の神目代が居を構えたと伝わる神目代屋敷跡や、岡本地区における有力者の居館とされる岡本居館があり、関連が窺える。

近世 近世の遺構はSX01のみ確認できた。SX01は攪乱影響や調査範囲が限られることから詳細は不明である。礫と陶器、土師質土器により人為的に短期間のうちに埋められた可能性が高い。また、SX01から出土した遺物の時期をみると、12～13世紀代の渥美産の壺や大窯第2～3段階に併行する志戸呂産の播鉢や大窯第4段階後半の陶器がみられるものの、登窯第4～6小期の遺物が主体といえる。SX01の形成時期は、最も新しく、まとまりを認められる出土遺物の時期から登窯第6小期（18世紀初頭）と捉えるのが合理的である。また、SX01の埋土に含まれた遺物に完形のものはないが、全体形を窺い知れるものが多いことも特徴といえる。破損した多数の器財を一度に廃棄した可能性が窺える。遺構形成時期が、宝永4年（1707）に発生した宝永地震と同時期といえ、関連する遺構である可能性は指摘できるが、調査の進展を待って評価する必要がある、今後の検討課題としておきたい。

(2) 岡本地区とその周辺における古代の様相

岡本地区とその周辺の遺跡の様相が、発掘調査や分布調査により徐々に明らかになってきた。ここでは、伝統的な在地集団の存在が窺える宇利山川西岸・日比沢川流域の遺跡群と、村上遺跡をはじめ古墳時代後期以降に遺跡が展開する新興地域の様相を対比し、猪鼻湖沿岸地域における古代の様相をまとめておきたい。

宇利山川西岸・日比沢川流域には、縄文・弥生時代から釣遺跡や郷外遺跡をはじめ、継続的に多

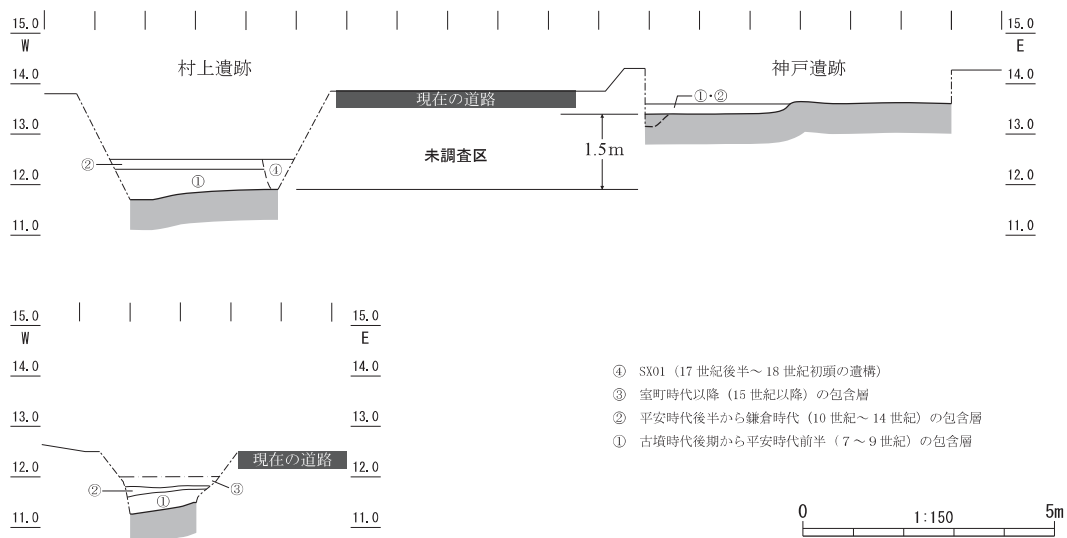
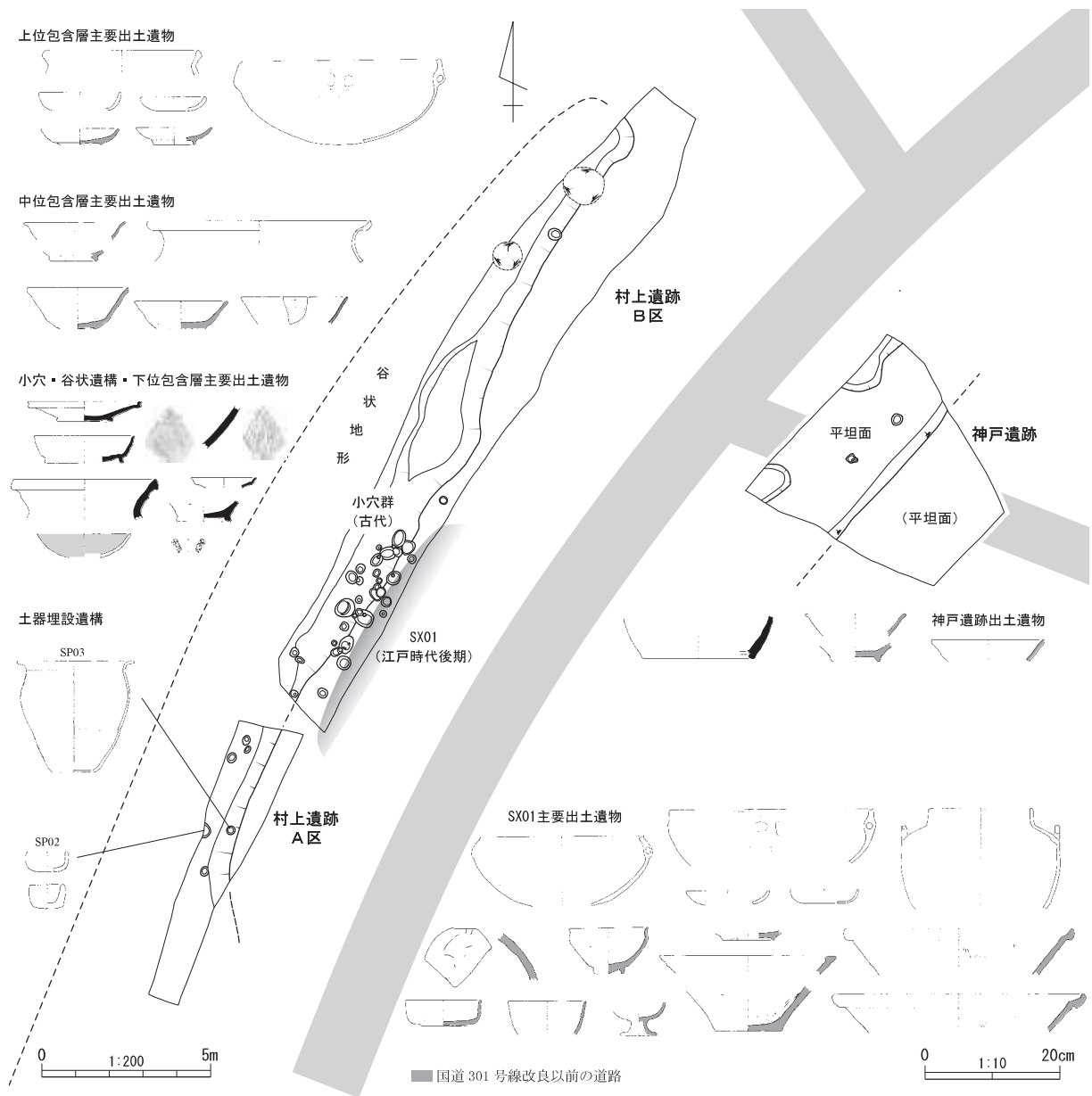


Fig.17 村上遺跡・神戸遺跡における調査成果

くの遺跡が営まれており、4口に及ぶ銅鐸の出土や総数50基を越すと伝わる釣古墳群の形成など、地域の中核を担った伝統的な在地集団の存在が窺える。

いっぽう、村上遺跡・神戸遺跡をはじめとした宇利山川東岸に展開する遺跡群は、近年の発掘調査や分布調査によって、古墳時代後期以降に遺跡が展開していることが明らかになりつつある。特に、7世紀末から8世紀前半の間に位置づけられる瓦が多数出土した楠木遺跡は、近傍に古代寺院が建立された可能性を示している。伝統的な在地勢力が根付く宇利山川西岸ではなく、新興開発地といえる宇利山川東岸に古代寺院が建立されていることは、地域情勢に変化があったことを窺わせる。楠木遺跡に所在が推定される古代寺院は、地域の有力者として代々、英多神社の神主を務めていた県氏（静岡県1994）の氏寺と想定するみかた（後藤2003）もある。また、岡本地区の北東に位置する北大里遺跡には、8世紀後半から9世紀前半に瓦塔が造立されたことが知られ（平野1992）、楠木遺跡に所在が想定される古代寺院に伴う山林寺院との指摘もある（後藤2003）。村上

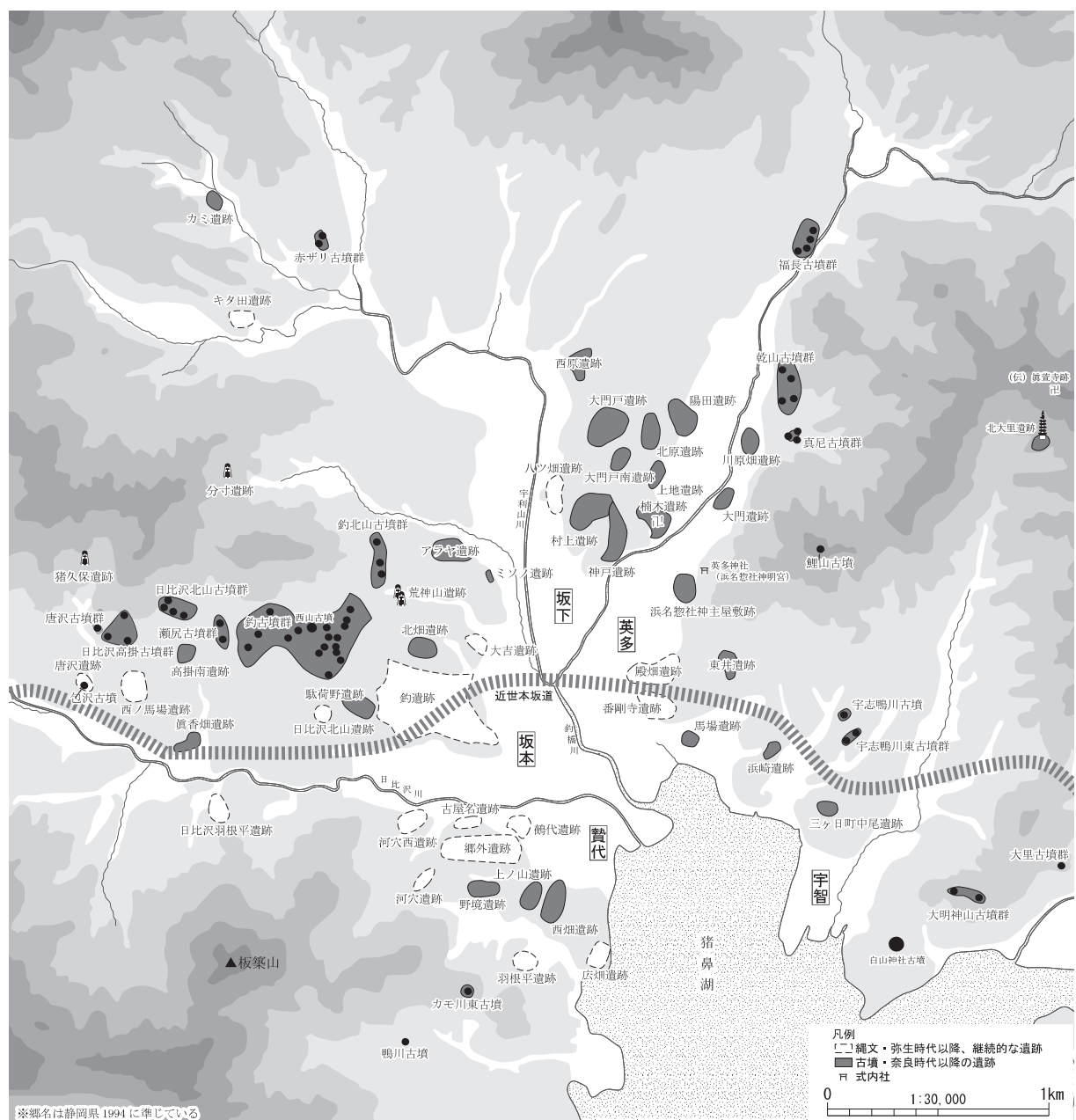


Fig.18 縄文時代から平安時代における岡本地区とその周辺の様相

遺跡や神戸遺跡の造営集団は明らかにできないが、古墳時代後期以降に段丘部分の開発を行い、古代寺院を建立するに至った集団が関与したと捉えることも許されよう。

現在のところ、浜名郡家の所在地については様々な見解が示されているものの、結論を見いだせていない。西遠江や東三河における造寺状況が、1郡1寺的なあり方を示すこと（鈴木一 2013）を鑑みると、岡本地区とその周辺に浜名郡家の所在を推定することも不可能ではない。しかし、浜名郡は、浜名湖南西岸から北岸までの広大な範囲にわたっており、湖西連峰から浜名湖に張り出している利木峠により、浜名湖南西岸（湖西市域）と猪鼻湖沿岸部（三ヶ日町域）に隔てられている。また、湖上交通を考慮する必要があるが、浜名湖南西岸を東海道、猪鼻湖北岸を東海道の別路とされる二見道（木下 2009）が通っていることから、どちらの地域も東西交通の要衝といえる。これらのことを踏まえると、分郡はされていないものの、両地域に郡家級の機能をもった施設が存在した可能性も想定しておく必要がある。村上遺跡とその周辺は、楠木遺跡の所在から地域の中核を担う拠点が存在した蓋然性が高く、古代における浜名郡の歴史を明らかにしていく上で、非常に重要な地域といえる。

（3）まとめ

村上遺跡をはじめとした岡本地区の段丘上に位置する遺跡は、調査の蓄積により精度を高める必要があるが、概ね古墳時代後期から新規に開発され、楠木遺跡もしくはその周辺に古代寺院を建立するに至ったことが指摘できる。中世以降においても、青磁碗のように階層性を示しうる器物を所有している点が注目でき、地域拠点の一つであったことが想定される。近世においては、18世紀初頭頃に一括廃棄された可能性が窺える遺物が出土した。宝永地震との関連性も含め、調査事例の増加を待って検討すべき課題といえる。

参考・引用文献

- 赤塚次郎 編 1996『鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
尾野善裕 2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第1分冊 発表要旨 東海土器研究会
木下 良 2009『辞典 日本古代の道と駅』吉川弘文館
後藤健一 2003「第6節 山林寺院」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県教育委員会
寒川 旭 2011『日本人はどんな大地震を経験してきたのか 地震考古学入門』平凡社
城ヶ谷和広 2010「第1章 総論 第3節 編年及び編年表 土師器・須恵器・施釉陶器（緑釉・灰釉）」
『愛知県史』資料編4 考古4 飛鳥～平安
鈴木一有 2013「7世紀における地域拠点の形成過程—東海地方を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集
鈴木敏則 2004『有玉古窯』浜松市教育委員会
鈴木敏則 2005「第5章 まとめ 第1節 出土須恵器について」『東若林遺跡』
鈴木敏則 2013「渥美湖西窯の山茶碗編年」『渥美窯編年の再構築』東海土器研究会
高橋佑吉 1978『浜名史論』浜名史論刊行会
中野晴久 2012「第1章 総論 第3節 常滑窯」『愛知県史』別編3 中世・近世 常滑系 愛知県
永原慶二 編 1995『常滑焼と中世社会』小学館
平野吾郎 1992「瓦塔」『静岡県史』資料編3 静岡県
藤沢良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯
藤沢良祐 2007「第1章 総論」『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系 愛知県
安井俊則 2012「第1章 総論 第2節 渥美窯」『愛知県史』別編3 中世・近世 常滑系 愛知県
静岡県 1994『静岡県史』通史編1 原始古代
静岡県考古学会 2012『志戸呂焼を考える』
浜松市教育委員会 2011『平成21年度 浜松市試掘調査概要』
浜松市教育委員会 2013『平成23年度 浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会 2014『平成24年度 浜松市文化財調査報告』
三ヶ日町史編集委員会 1976『三ヶ日町史』上巻 三ヶ日町
三ヶ日町史編集委員会 1979『三ヶ日町史』下巻 三ヶ日町

報告書抄録

書名（ふりがな）	村上遺跡（むらかみいせき）							
編著者名	井口 智博・和田 達也（編集）							
編集・発行機関	浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2 TEL（053）457-2466 FAX（053）457-2563							
発行年月日	2014 年 3 月 20 日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むらかみいせき 村上遺跡	静岡県 浜松市北区 三ヶ日町岡本	22202	05- 05- 91	34 度 81 分 44 秒	137 度 54 分 84 秒	2013 年 7 月 1 日 		

村 上 遺 跡

2014 年 3 月 20 日

編集・発行機関 浜松市教育委員会
 （浜松市市民部文化財課が補助執行）

印 刷 松本印刷 株式会社



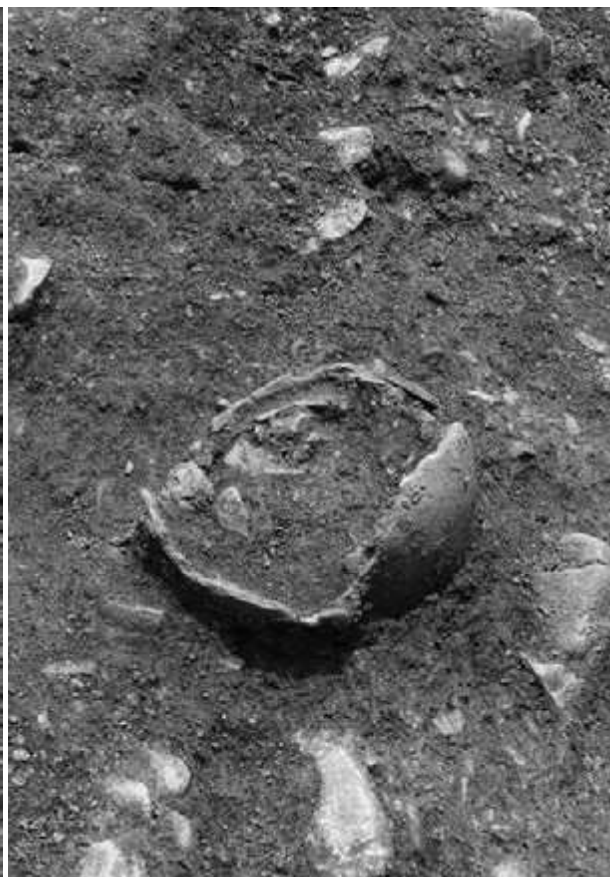
村上遺跡 A 区 全景（南西から）



1 村上遺跡 A 区 遺構検出状況



2 SP02 手捏ね土器出土状況（北から）



3 SP03 土師器甕出土状況（北西から）



村上遺跡 B区 全景（南から）



1 村上遺跡 B区南半 遺構検出状況（南西から）



2 SP14 遺物出土状況（北西から）



3 SX01 検出状況（南西から）



1 遺構・下位包含層 主要出土遺物



2 遺構・下位包含層 出土遺物



1 中位包含層 主要出土遺物



2 中位包含層 出土遺物



1 上位包含層 主要出土遺物

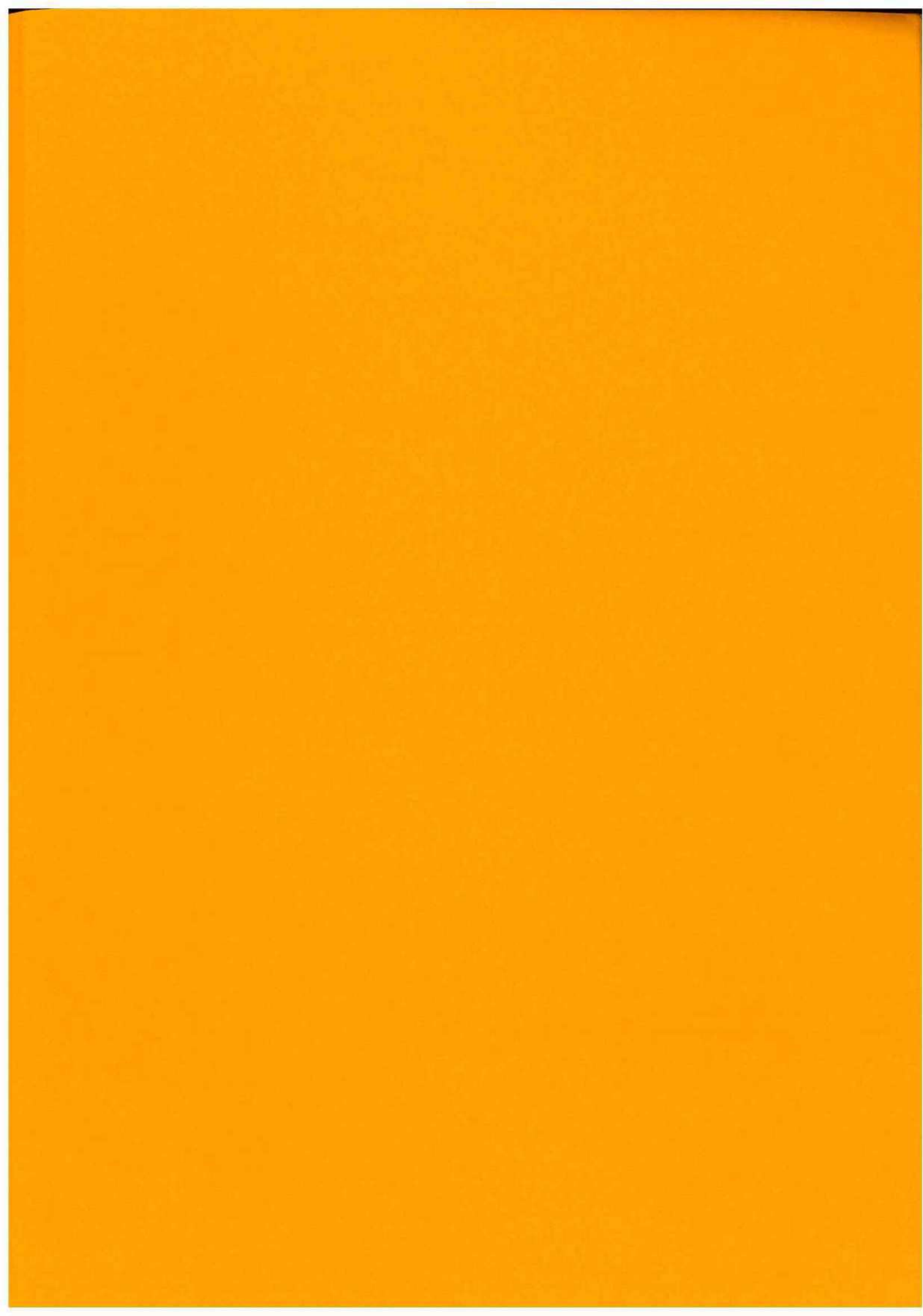


2 上位包含層 出土遺物



3 SX01 主要出土遺物





Murakami Site

The 1st excavation report

A Report of Archaeological Inverstigation
by the Northside of Lake Hamana



March,2014

Hamamatsu City Board of Education